

ディメンジョン的アプローチとはなにか？

黒木俊秀

九州大学大学院人間環境学研究院実践臨床心理学専攻

今年 5 月に遂に公表されたアメリカ精神医学会(APA)の精神障害診断分類体系である DSM-5 は、DSM-IV (1994 年)以来、実に 19 年ぶりの改訂版であり、その動向が大いに注目を集めている。公表の直前に、National Institute of Mental Health のディレクターである Insel が、新しい改訂版は妥当性を欠くと非難したことも話題になった。

振り返ると、今度の改訂版に至る準備は 1999 年夏に始まっており、以来、13 年にも及ぶ長い議論と検証を経てきたことになる。最初の段階は、2000 年に開催された DSM の新たな改訂作業の基本方針を確定するための研究会議であり、その成果は 2002 年に” Research Agenda for DSM-V4)” (邦題「DSM-V 研究行動計画」、みすず書房)として出版された。この” Agenda” の邦訳に中井久夫氏らとたずさわった演者(黒木)は、DSM-III (1980 年)以来の現行の診断カテゴリーの妥当性に対する疑義が米国精神医学界の中枢より強く提起されたことに驚かされた。なかでも新しい改訂版は、より科学的な根拠にもとづく診断分類を目指すために、DSM-III 以来のカテゴリー的な診断分類に代わってディメンジョン的なアプローチを採用すべきであると提言されている点が印象に残った。どうやら、APA は次の改訂版によって DSM-III 以来の診断分類体系にパラダイム・シフトを迫らしいと思われた。その理念の基底には、DSM-III によって無理論的にカテゴリー化された各精神障害相互の境界はさほど明瞭なものではなく、相互に移行しうる連続体(スペクトラム)を構成しているに違いないという認識があり、それは精神障害の神経生物学的研究からの要請であった。

しかし、実は DSM-5 が(当初)掲げたディメンジョン的アプローチとは、精神と行動の異常を計量的尺度(すなわち、ディメンジョン)により評価し、統計学的な数理モデルを用いて分類する手法を指すのである。その統計学の方法論は、計量心理学ではよく知られているが、一般の臨床医にはお馴染みでない。もしも、DSM-5 が新たなパラダイムとして掲げるディメンジョン的アプローチの正体が、実は、こうした心理測定尺度による計量的な評価と分類だとすれば、そこから導かれる精神障害の定義や診断基準はおよそ臨床医の一般的な感覚からかけ離れ、現行の診断基準以上に実際の精神科臨床には役立たないのでないかという懸念が頭をもたげる。

とはいえ、数理統計学こそが、今後の科学的な診断分類を支える有力なツールということなのであろう。既に抗うつ薬の臨床試験データの解析に潜在クラス分析が導入されつつあり、関連する遺伝子や脳画像の複雑なデータを診断基準に組み入れるには適切な方法である。当面は、現行のカテゴリー的分類を維持しつつ、最初は試験的に、それから徐々にディメンジョン的アプローチを試みてゆくことになるのではないだろう

うか。多くの臨床医はカテゴリー的分類が身に染み付いているので、これは仕方がない。ディメンジョン的な方法論は、精神科臨床よりは先に生物学的研究において進められるだろう。先の Insel の批判は、その明らかな宣言であるように思われる。